

日本の中学生EFL学習者に5文型導入は適切か?

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 矢野, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007870

日本の中学生 EFL 学習者に 5 文型導入は適切か？

Is Introducing the Five Sentence Patterns of English Sentences
Appropriate for Junior High School EFL Learners in Japan?

矢野 淳
Jun YANO

（平成 25 年 10 月 3 日受理）

1. はじめに

日本の英語教育で扱われている 5 文型理論は、Onions（1932）によってその原形が提唱され（表 1）、細江（1966）により日本で紹介された（表 2）。

表 1：Onions（1924）の FORMS OF PREDICATE（さらに例文あり）

FIRST FORM OF THE PREDICATE	Day dawns.	Subject + Verb
SECOND FORM OF THE PREDICATE	Croesus was rich.	Subject + Verb + Predicate Adjective or Predicate/ Noun or Predicate Pronoun
THIRD FORM OF THE PREDICATE	Cats catch mice.	Subject + Verb + Object
FOURTH FORM OF THE PREDICATE	We taught the dog tricks.	Subject + Verb + Two Objects
FIFTH FORM OF THE PREDICATE	Nothing makes a Stoic angry.	Subject + Verb + Object + Predicate Adjective or Predicate Noun

日本の学校英語教育において、5 文型は伝統的に高校 1 年時に導入されてきたが、笠島・関・明石・秋山（2012：71）は、巻末の資料としてではなく、「学び方コーナー② 5つの文構造」として、中学 3 年生の文部科学省検定教科書で紹介している。この教科書の中では、中学生に向けて、車両をつないだ電車のカラー・イラストを用いて、5 文型を説明している。YANO（1996）及び YANO（2012）は、この 5 文型について、英文の文意理解と文型識別について実証研究を行っている。

表 2：細江（1966）の文の形式（さらに例文あり）

第 1 形式の文	Stars twinkle.	主部 + 述部
第 2 形式の文	James has become (a) (famous) soldier.	主部 + 述部（述語 + 補語）
第 3 形式の文	Cats catch mice.	主部 + 述部（述語 + 目的）
第 4 形式の文	I gave him (a) book.	主部 + 述部（述語 + 間接目的 + 直接目的）
第 5 形式の文	Father made me (a) merchant.	主部 + 述部（述語 + 目的 + 補語）

本研究では、大学生・高専生・高校1年生・中学3年生と、5文型について調査してきた参加者の学年を中学2年生まで下ろし、中学生に対して5文型導入は適切か否か、適切であれば何年生がよいのかを考察する。

2. 先行研究

5文型に関しては、多くの英語教育の専門家が、万能ではないことを指摘している。荒木(1983:18)は、「英語には五文型で処理できない構造がある。」と指摘し、池上(1995:20)は、「[[問題点は] この考え方 [5文型] では、〈名詞句〉や〈形容詞句〉として表現されていると正当な文構成要素(S、O、C)として認定されるが、同じ程度に文の構成に欠かせない要素であっても〈副詞句〉として表現されていると、一切無視してしまうということである。」と述べ、金谷(1992:29)は、文型を決めがたいものが第5文型に分類されがちである傾向を、「『補語』は文型のがらくた箱(catchall)になる。」と表現している。

YANO(1996)では、異なる英語学習の背景を持つ3つの参加者群で、短い12個の英文について、文意が分かること(M)と文型が識別できること(P)の2つの要素に関して、調査を行った。「MとPは無関係(独立)である」と帰無仮説を立て、SPSSを用いて独立検定を行った結果、高校1年生と大学生とでは、ほぼ正反対の傾向と思われる結果が出た。つまり、高校1年生では、検定ができた11問中3つの英文で帰無仮説が棄却され統計的有意となり、MとPの間に何らかの関係があることが示唆されたが、11問中多数である8つの英文で帰無仮説は棄却されなかった。一方、大学生では、検定ができた6問中、多数の5つの英文で帰無仮説が棄却され統計的有意となった。これは、MとPの間に何らかの関係があることの統計的裏付けとなる。一方、棄却されなかったのは5問中わずか1つの英文であった。

YANO(2012)では、同じ調査方法にて、中学3年生に対して調査を行った。中学3年生の結果とYANO(1996)の高校1年生の結果は非常に似ており、仮に有意水準 $p < 0.06$ とすると、中学3年生と高校1年生は非常に似た傾向を示す結果を独立検定で得た。

3. 研究方法

3.1 本研究の目的

YANO(1996)及びYANO(2012)を発展させ、中学生の英文の文意を理解する力と文型を識別する力の間の関係を調査することで、従来高校1年生で導入されてきた5文型を中学生に導入することは適切か否か、適切であれば、中学何年生で導入するのが適切かを調査する。

3.2 参加者

2010年12月に、中学2年生80名のデータを収集し、分析した。参加者数が少ないのは、問題指示文中「和訳し」の部分で、答案に記述するまでに至らなかった生徒が多数存在し、有効なデータとならないため、排除したためによる。

3.3 方法

YANO(1996)及びYANO(2012)と同様、Appendixで示したテスト・シートを用いて、中学2年生に対してテストを実施し、その人数を表3のようなクロス集計表にまとめた。すなわち、文意が理解できることをMとし、文型識別ができることをPとし、不正解を0、正解を

1とした。文意が理解できているか否かは和訳から判断した。例えば、3の主語peopleをpleaseと勘違いしたと思われるような和訳は、VOCの関係が正しく答案に表現されていれば正解とした。「文型識別ができる」とは、テスト・シートの下部にある5文型を代表する5つの英文から、「最も似た文の型」が選択できるか否かで判断した。

5文型に関する一連の研究の中で、筆者が常に興味を持っているのは、クロス集計表中のMOGとPOGの人数である。つまり、文意は理解しているが、文型識別はできなかった参加者群をMeaning Only Group (MOG)とし、逆に、文意は理解していないが、文型識別ができた参加者群をPattern Only Group (POG)とし、その人数を比較した。

表3：YANO (1996)、YANO (2012) 及び本研究のクロス集計表

		文型 (P)	
		0	1
文意 (M)	0		POG
	1	MOG	

4. 結果と考察

4.1 MOGとPOGの人数の比較

表4より、中学3年生は12問すべてのケースで、MOGの人数がPOGを上回った。(MOG > POG)

表5より、中学2年生では、Q1とQ12の2つのケースで人数がMOG < POGとなり、Q2でMOG = POGとなった。YANO (1996) では、高校1年生において、Q1、Q2、及びQ12で人数がMOG < POGとなったが、これは5文型を習ったがゆえに、文型識別において「勇み足的」に誤答したと思われるものがあり、中学2年生の誤答の原因とは異なると考察した。

注目すべきは、12個の英文すべてでMOG > POGとなった中学3年生に対して、中学2年生では3つのケースでMOG > POGとなっていないにもかかわらず、12問の総計となると、中学3年生でMOGの人数がPOGを上回った率が25.1%なのに対して、中学2年生はMOGがPOGを30.4%と、中学3年生を超えた率で上回ったことである。

表4：中学3年生114名の結果

Q1からQ12までの総計 (MOG > POG by 25.1%)

Q	文型	MOG (%)	POG (%)	大小比較	上回った%
Q1	SVOO	12.3	9.6	MOG > POG	by 2.7%
Q2	SVOO	9.6	3.5	MOG > POG	by 6.1%
Q3	SVOC	37.7	1.8	MOG > POG	by 35.9%
Q4	SVOO	32.5	3.5	MOG > POG	by 29.0%
Q5	SVC	9.6	0	MOG > POG	by 9.6%
Q6	SVOO	13.2	7.0	MOG > POG	by 6.2%
Q7	SVOO	28.1	1.8	MOG > POG	by 26.3%
Q8	SVOC	33.3	0.9	MOG > POG	by 32.4%
Q9	SVO	67.6	0	MOG > POG	by 67.6%
Q10	SVOC	66.6	4.4	MOG > POG	by 62.2%
Q11	SVOO	21.1	0.9	MOG > POG	by 20.2%
Q12	SVOC	8.8	6.1	MOG > POG	by 2.7%

表5：中学2年生80名の結果

Q1からQ12までの総計 (MOG > POG by 30.4%)

Q	文型	MOG (%)	POG (%)	大小比較	上回った%
Q1	SVOO	17.5	20.0	MOG < POG	by 2.5%
Q2	SVOO	10.0	10.0	MOG = POG	by 0%
Q3	SVOC	57.5	2.5	MOG > POG	by 55.0%
Q4	SVOO	45.0	1.3	MOG > POG	by 43.7%
Q5	SVC	26.3	0	MOG > POG	by 26.3%
Q6	SVOO	18.8	5.0	MOG > POG	by 13.8%
Q7	SVOO	46.3	0	MOG > POG	by 46.3%
Q8	SVOC	55.0	3.8	MOG > POG	by 51.2%
Q9	SVO	73.8	1.3	MOG > POG	by 72.5%
Q10	SVOC	43.8	5.0	MOG > POG	by 38.8%
Q11	SVOO	37.5	7.5	MOG > POG	by 30.0%
Q12	SVOC	8.8	18.8	MOG < POG	by 10.0%

4.2 独立検定

表6は、SPSSを用いて独立検定を行った結果である。

表7は、独立検定ができた英文について、帰無仮説が棄却されたケースの数、棄却されなかったケースの数を示している。帰無仮説が棄却されたものは、統計的有意となり、MとPの間に何らかの関係があることの統計的裏付けが得られたことを意味し、棄却されなかったものについては、一連の研究で得られたデータでは結論が出なかったことを意味する。

表6及び表7から、独立検定がなされた11問で考えると、中学3年生の結果は、高校1年生の結果と似ている。仮に、 $p < 0.06$ とすると、棄却されたのが4問（どちらもQ2・6・8・12）であり、棄却されなかったのは7問（どちらもQ1・3・4・7・9・10・11）で、非常によく似た傾向になる。

表6：YANO (1996) 及びYANO (2012) に中学2年生の結果を加えた検定統計量

Q	文型	大学生 (1995)	高専生 (1995)	高校1年生 (1995)	中学3年生 (2010)	中学2年生 (2010)
Q1	SVOO	.00091***	.00004***	.43999	.252	.425
Q2	SVOO	.00124**	.04193*	.00003***	.039*	.013*
Q3	SVOC	----	.24479	.29547	.073	.328
Q4	SVOO	----	.68994	.77768	.663	.359
Q5	SVC	----	----	----	----	----
Q6	SVOO	----	----	.05910	.004**	.004**
Q7	SVOO	.00004***	.12027	.25162	1.000	.116
Q8	SVOC	----	----	.02147*	.000***	.374
Q9	SVO	----	.60477	.27957	.199	1.000
Q10	SVOC	.19722	.37378	.74994	.519	.109
Q11	SVOO	.00001***	.19043	.63610	.130	.239
Q12	SVOC	.00000***	.26860	.00007***	.000***	.000***

カイ2乗検定及びフィッシャーの正確検定による。*** $p < 0.001$ 、** $p < 0.01$ 、* $p < 0.05$

表7：帰無仮説：「MとPは無関係（独立）である」の独立検定の結果（数字はケースの数）

 $p < 0.05$

帰無仮説	大学生 (1995)	高専生 (1995)	高校1年生 (1995)	中学3年生 (2010)	中学2年生 (2010)
棄却	5	2	3	4	3
棄却されず	1	7	8	7	8

高校1年生、中学3年生、中学2年生と、3群で得られた結果は似ている。しかし、従来5文型を学習していた高校1年生と中学3年生の結果の方が、中学3年生と中学2年生の結果より似ている度合いが高いと判断し、中学3年生と中学2年生の間にある種の「境界線」を感じる。よって、中学生に対する5文型導入は、中学3年生には適切と言えると考察し、中学2年生には本研究の段階では時期尚早と考える。

4.3 ケース別MとPの関係

独立検定において、帰無仮説が棄却され、統計的有意となり、MとPの間に何らかの関係があることが示唆されたケースを、文型に着目してまとめてみると、表8のようになる。

12個の英文に関して、参加者は5群あり、ケースの個数の合計は60となる。表8より、英文を構成する要素の数の多い英文が比較的高い割合となっており、要素の数の多い英文ほど英文の文意を理解すること（M）と文型識別ができること（P）の間に関係が見られる傾向がある。

表8：ケース別MとPの関係

文型	MとPが関係ありの英文数/60個中当該文型の英文数	割合（％）
SVOO	11/30	36.7
SVOC	6/20	30.0
SVO	0/5	0
SVC	0/5	0

5. 結語

5文型について解説している文法書で、例えば宮川・林・向後・小松・林（2010：20）は「5文型は最も基本的な文構造の理解に役立つが、すべての文をどれかのタイプに分類しなければいけないといったようなものではない。」と読者に呼びかけているが、このような文法書は少数派で、指導者が学習者に対して補足的に呼びかける必要があると思われる。

5文型を高校1年時に指導するのと同様、中学3年生の教科書で取り扱われても、文型を識別することが目的になってはいないか留意して指導するべきと考える。

本研究に関して、一口に高校1年生と言っても、1995年当時の高校生と現在の高校生とでは傾向が異なる可能性が考えられる。新たなデータをより多く収集しての検証、理解レベルではなく、表現レベルで5文型は有益ではないか等、さらなる発展研究が考えられる。

謝辞：本研究に際し、参加者である中学生の皆さん、テストを実施して下さった中学校の先生方に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 荒木一雄 (1983) 「学校英文法の問題点 (2)」『現代英語教育』 5月号 東京: 研究社 17-19 頁
- 池上嘉彦 (1995) 『<英文法>を考える <文法>と<コミュニケーション>の間』 東京: 筑摩書房
- 笠島準一・関典明・明石達彦・秋山敏晴・荒井貴和・アレン玉井光江他 (2012) 『NEW HORIZON ENGLISH COURSE 3』 東京: 東京書籍
- 金谷憲編著 (1992) 『学習文法論』 東京: 河源社
- 細江逸記 (1966) 『精説英文法汎論』 訂正新版 東京: 篠崎書林 (初版 1917年)
- 宮川幸久・林龍次郎編、向後朋美・小松千明・林弘美著 (2010) 『アルファ英文法』 東京: 研究社
- Onions, C.T. (1932). *An Advanced English Syntax*. (6th ed.). New York: The Macmillan Company (1st ed. 1904)
- YANO, J. (1996). The Usefulness of the Five Sentence Patterns in Understanding English 『東京学芸大学大学院英語研究会誌LEO』 第25号 43-66頁
- YANO, J. (2012). Is Introducing the Five Sentence Patterns of English Sentences Appropriate for Junior High School Students? 『静岡大学教育学部研究報告 (教科教育学篇)』 第43号 41-53頁

Appendix

YANO (1996)、YANO (2012) 及び本研究で使用されたテスト・シート

次の各英文を和訳し、その文と最も似た文の型を持つ文を下のアからオより一つ選んで、() に記入して下さい。

1. John told Mary the way to the station. ()

2. John showed Mary some pictures. ()

3. People call him John. ()

4. John teaches Mary how to cook. ()

5. John is a good tennis player. ()

6. John sent Mary a small box. ()

7. John made Mary a pretty doll. ()

8. John named his dog Candy. ()

9. John gave an interesting book to Mary. ()

10. John keeps his room clean. ()

11. John made Mary some coffee. ()

12. The music made John sad. ()

ア. John is Mary's brother.

イ. John gave Mary some flowers.

ウ. John made Mary happy.

エ. John likes music.

オ. John sang.